

# 裏町のピーターパン

ストレートプレイ・六人版（二〇〇五年改訂）

作・酒井一成

時代・場所

たぶん現代。とある裏町。

登場人物

たける 裏町にひそむ悪ガキ。孤児らしい。

良彦 ”

ねずみ ”

克也 この裏町を根城にするチンピラ。

太郎 保護観察官。警察署長の息子。

朋子 家出してきたお嬢さま。

# 第一場

闇の中に二人の小さな人影が現れる。一人が手に持った絵本らしきものを読んでいるらしい。

たける 『ピーターパンは本当に心の底から笑いました。そして言いました。』何か、すてきで素晴らしい事を考えるんだ、そしたら空中に浮く事ができる。』それだけ。』空ンデイが聞きました。』それだけだよ』  
ピーターが答えました。』さあ、一緒に行こう。そして僕らに毎日、楽しいお話を聞かせておくれ。僕たちはいつまでも子供のままで、君がいないと寂しいんだ』そう言てピーターパンは、手に持った妖精の粉を、空ンデイにちと振りかけました。』見く、わたし、飛んでる！わたし、飛んでる。』さあ、ネーバーランド行こう』二人は、窓から飛び出しました。ネーバーランド 向かって！

舞台が明るくなる。裏町の街角に少年が二人

良彦 もう捨てちまえよ、その汚い本

たける やだね

良彦 捨てきてもう三日もたつのに、よく飽きずに読むよな

たける いい話じゃないか

良彦 そいつは捨ててあたらんだる。本の持ち主だて、そいつがくだらなびと思たから捨てちまたらんだよ。

たける じゃあ、おまえもくだらなびから捨てられたのか？

良彦 多分な。捨て子なんてみんなくだらなびもんよ。

たける 俺は捨てられたとは思てないぞ。

良彦 ほう？

たける 俺が捨てたと思てるよ。

良彦 何を

たける 世の中を

良彦 なにかこうつけてんだよ。読みたければな、俺の見えないところで、俺に聞こえないように読んでくれ。

たける つまんないやだね

良彦 うるさい。仕事だ。

たける よし！

二人は立ち上がる

二人 カンパ、おねがいします。

そへ、克也と朋子

克也 だから、彼女お

たける カンパお願します。

良彦 やめろ。

たける なんて。

良彦 あれ、チンカツだぞ。

たける 隠れる。

ふたり、物陰に隠れる。

克也 この辺はさうだからさ、俺が付き合せてあげるよ。

朋子 えでも。

克也 そう言わずにさ。

朋子 あ、どちらさまですか。

克也 はきり言うけどさ、俺この辺りを仕切ってるのよ。悪、連中もさ、俺の顔見ると逃げ出すの。

朋子 本当ですか。

克也 なんだよ、信じてないの。

朋子 だて、そんな偉そうな人に見えないんですもの。

克也 なな、そこがいいところなんだよ。男はさ、いくら偉くても、偉そうな顔をしちゃダメなんだよ。でもわかるでしょ、体中からあふれる正義のパワー。

克也 ボディービル的なポーズを取る。

朋子 踊ってるんですか。

克也 いや、ほら、このあたりにさ。

良彦 あれ、もしかして口説てるのかな。

たける きれいな人だな。

良彦 あ、女の人か？

たける うん。

克也 このあたりでのさばってる大島カンパニーってあるじゃない。あれさ、いろいろ悪、ことしてるみたいだけど、このあたりはさ、俺がいるから近寄れないの。

朋子 大島カンパニーって悪、ことしてるんですか。

克也 してる、してる。君みたいなきれいな子が一人、歩いてたら、すぐやられちゃうよ。

朋子 なにをされるんですか。

克也 いや、そうやってまじめな顔で聞かれると照れるけどさ、あんなことか、こんなことか、ちょっと耳貸して。

克也 朋子に内緒話

たける お、耳きわてるぞ。

良彦 なにあせてるんだよ

たける だて。

良彦 大声出すな

克也 朋子から離れる

克也 なそうやて悪いことばかりしてる大島カンピーから俺は人々を守るわけだ

朋子 そうなんですか。

克也 感動したか？

朋子 はい。

克也 それだけじゃないんだこの辺りにはさ悪ガキがうろついてるんだ

たける 俺達のことか。

良彦 多分

朋子 ワルガキでなんですか

克也 なんかこう態度のでかいガキがふたりでさ

朋子 ガキでなんですか

たける 少年と言え！

物音に気づいて振り返る克也

たける わんわん

良彦 じゃあおお

朋子 少年ですか？

克也 少年なんでもんじゃないよ汚んだもうからだ中ぼろぼろでさしかも態度がでかくて頭悪いの。

たける 言いたいこと言ってくれるな

良彦 ぶん殴てやろうか。

良彦 立ち上がりかける たける あわてて止める 克也 振り返る

克也 なんだよ あいつらか？

克也は見当漢のところを目で探しているが 朋子は隠れている二人に気がつく。

克也 あいつら金ないからさ 君みたいな人がふらふらしたら あいつらすぐにたかてくるから 俺がっいてさ 守てやるよ。

朋子 お話したいな

克也 誰と。

朋子 その、ワルガキさんたち

克也 なに言ってるんだよ 汚いぞ 病気が移るぞ。

良彦 あのやろう！

克也 十メートルくらいの所に来ただけでさぶーんと匂いがするんだから 俺はあつらを人間生ゴミとよんでる。

良彦 おひ、大島カンパニーのものだ！

克也 はい！

と深おしぎ

克也 どうも 気がつきませんで失礼しました。お知らせいただければお迎えに参りましたのに。

たける 良彦が出てくる。

良彦 お知らせいただければだと！おまえごときチンピラになぜわれわれが連絡しなければならぬんだ。

克也 はい、失礼いたしました。

良彦 今後気をつける。

克也 はい。

たける その女だが、おまえの知り合いか？

克也 はい。いいえ。

良彦 どっちだ！

克也 そこで知り合いました。

たける よし。俺達が預かる。

克也 え？

顔をあげたとたん 相手の正体に気づく。

克也 なんだ、おまえたちが。

良彦 おまえたちとはなんだ。どうせ俺達は生ゴミだよ。

たける どうせ病気持ちだよ。

克也 またく、脅かしやがって。(朋子に)こいつらだよこいつら

朋子、たけるたちに近寄ろうとする。

克也 やめろよ。病気が移るぞ。

良彦 てめえはたおすぞ。

克也 やれるものならやってみろ。

良彦 上等じゃないか。

にらみ合う二人 たける 克也から財布をすり取る

たける おい、これはなーんだ？

克也 やばい。

朋子 それは、わたしのお財布です。

良彦 なあんだ、珍しく損得抜きで女を口説てるのかと思たら、ただのスリじゃないか。

克也 なんだと。

たける お嬢さん、これがチンカツの正体ですよ。

朋子 チンカツ？

良彦 チンピラの克也、略してチンカツ。最低の男だよ。

克也 貴様ら！

たける あ！大島カン二ーだ！

克也 どうも、気がつきませんで失礼しました。お知らせいただければお迎えに参りましたのに……だまし  
たな。

良彦 ばーか。

克也 ちきしょう、覚えてろ。

たける じゃあな。

克也 去ていく。

良彦 進歩のない奴だな。

たける そんなに大島カン二ーがこわいかな。

良彦 ただ臆病なだけだろ。

たける うん（朋子にほら、あんたの財布だろ。

財布を投げ渡す。

朋子 ありがとうございます。

たける 気にするなよ。

朋子 あ、生ゴミなんですか。

良彦 あんな奴の言うこと真まに受けるなよ。それよりさ、俺達から言うのも何なんだけど。

朋子 はい。

良彦 助けてもらったら、それなりの礼儀れいぎでもあるよな。落とした財布拾ってもらえば、一割お礼するわけだし。

朋子 分かりました。お金がなほんですね。

良彦 まあ、はっきり言えばな。

朋子 わたしもなんです。

たける え？

良彦が財布を改めると確かにからっぽ

良彦 あんたいいところのお嬢さんじゃなの？

朋子 お金でわたし触たことがないんです。いつもヒゲ爺が出してくれたから

良彦 ヒゲジイ？

朋子 とっても優しい人なんです。こんな太って髭はやしてるんだけど、わたしが行くところにはいつもいてきてくれるんです。

たける 本当のお嬢さまなんだ。

良彦 で、今日はその、ヒゲジイは？

朋子 寝てます。

良彦 いつもついてくるんじゃないの？

朋子 そろと近寄って後ろからぶっつて蹴飛ばしたらソファの向こうまで飛んでいって寝ちゃいました。  
た。

良彦 家出してきたんだ、一文無しで。

朋子 はい。

良彦 嬉しそうな顔するなよ、で、なんで家出なんてしたんだ？

朋子 わたし、子供の頃からピーターパンが好きだったんです。

良彦 ピーターパンねえ、幾つ？

朋子 十九。

良彦 年上かよ。

朋子 でもいつになってもピーターパンが迎えにこないのでわたし、自分で行くことにしたんです。

良彦 どうも？

朋子 ネー、ランド。

良彦 ピーターパンに会いに？

朋子 はい。

良彦 ダメだ、こりゃ。

朋子 遠いんですか？

たける 心配するなよ、俺達が連れてってやるよ。

良彦 どうも？

たける ネー、ランドいきたいんだろ、俺達が連れてってやる。

朋子 うれしい！

良彦 おび、ちよとごよよ。

良彦が、たけるを隅につれていく。

良彦 おまえ 気でも狂たのかよ。  
たける なんだよ。  
良彦 俺は知らないからな。おまえ 何とかしろよ。  
たける そう言わずにつき合えよ。  
良彦 なにか 緑のタイツはいて 空飛ぼうていうのか。てめえ 連れてけるものなら連れてみるよ。  
たける いいじゃないか。だてて かわいそうだろ。  
良彦 なにか かわいそうだ。俺は一文の得にもならないことはやらない主義なんだよ。  
たける いいか よく聞けよ。あの人はどうみてもいいとこのお嬢さんだよな。  
良彦 ヒゲジイにピーターパンだもんな。  
たける 大金持ちの親にとりて娘の価値てのは どれくらいのものだろう。  
良彦 十億はくだらないな。  
たける 俺達が彼女の家を探し出して送り届けるわけだ。  
良彦 よし、乗た。  
たける いいだろう。  
良彦 本当にそれだけだよな。おまえ なんか変なこと考えてないよな。  
たける なんだよ 変なことして。  
良彦 まあいい。付き合うよ。  
朋子 いつ出発するんですか。  
良彦 そうですわねえ。  
朋子 ネーランドぶて遠んですよね。  
良彦 なに、すぐそこですよ。  
朋子 皆さんにはすぐそこかも知れませんが、わたし、空飛なんです。  
良彦 皆さんにはすぐそこかも知れませんが、わたし、空飛なんです。  
教えますよ。  
たける 調子に乗るなよ。  
良彦 つきあえていつたのは誰だよ。  
朋子 教えてもらってるんですか。  
たける まかせてください。  
朋子 ありがとうございます。頑張ります。まず、どうするんですか。  
良彦 ちょっと待ってください。そんな急いわれても。  
たける いろいろ訓練をしないとけいなんですよ。  
朋子 でも、空ンディーは、すぐ飛たと思っんですけど。  
良彦 それはおとぎ話。いや、まあ体重に応じていろいろコースがあて  
わたし、太てますか。

たける いや、そういうわけじゃ、おい。

良彦 まあ、その、ちよとだけ。

朋子 わたし、痩せます。

たける いや、そんなむきにならなくても。

良彦 じゃあ、とりあえず僕らの隠れ家にくきますか。明日から訓練開始っていうことよ。

朋子 はい。

そへ、ぼろぼろの服を来た女の子。

ねずみ ねえ、なにやてるの。

たける なんだ、ねずみか。

ねずみ だれ、その人。

たける この人はなあ（朋子に）名前なんていいましたは。

朋子 申し遅れました。朋子です。

ねずみ 朋子ねえ、どうしたの、その子。

たける おまえには関係ないんだよ。

ねずみ ひどい言、方この間おまわりに追ひかけられたとき、あたしが囿になって逃がしてあげたの、忘れたの？

たける うるさいなあ。その汚い顔をらとと引込めな。

ねずみ お礼もいってもらてないわよ。あの時は万引きだからつかまたら孤児院に送り返されるところだったんですよ。

朋子 万引きでなんですか。

たける 気にしないで。（ねずみに）帰れてらつてるだろ。

ねずみ せか、くいこと教えてあげようと思てたのに。

良彦 なんだよ、いいことして。

ねずみ あのねえ、

たける 聞きたくないね。

ねずみ 最近あんたたちを追かけ回してる。おせ、かいなおまわりがいるじゃない。

良彦 保護観察員っていうんだよ。

ねずみ あいつ、結婚するんだらて。

たける めでたいじゃないか。

ねずみ ところが、その相手が誰だと思う？ 大島カン二ーの関係者らしいのよ。

たける ありがとよ、じゃあな。

ねずみ 話はこれからなのよ。

たける 関心ないね、いいから消えろよ。なんだ、そのぼろぼろの服はよ。

第二場

ねずみ おたがいさまでしょ。

たける 汚い顔して、男みたいな言葉、かいやがて。女ていうのはな、朋子さんみたいにきれいで、良匂い  
がするもんなんだよ。まあ、おまえには腐った臭い匂いがお似合だけどな。

ねずみ ひどいよ。

たける 本当だから仕方ないだろ。じゃあな。

たけると朋子 帰る。

ねずみ ひどいじゃないかよ。

良彦 気にするなよ。あつ、少し舞上がってるんだよ。

ねずみ なんだよ、あの女。

良彦 空ンディーだよ。

ねずみ なんだ、それ。

良彦 おどぎの島に行くんだとさ。

ねずみ あつ、これかと、頭の上で手をまわす。

良彦 さあな、どちらにしても宝の山だな。

ねずみ ふん。

良彦 じゃあな。

ねずみ おい。

良彦 しばらく近寄りなほうがいいんじゃないかな。たけるもすっかりアホになってるみたいだしな。

ねずみ でも…

良彦 気になるか。

ねずみ うるさいな。

良彦 ああ、その調子だ。弱気なねずみなんてみたくもないや。

ねずみ だて。

良彦 似合わないからやめな。じゃあな。

ねずみ おい、見張てるよ。

良彦 何を。

ねずみ うるさいな、気にするなよ。

良彦 わかてるよ。じゃあな。

良彦 帰る。暗転。

この地区の警察署長の私宅。署長の部屋。一人息子の太郎が、署長と向かい合っている。ただし舞台

上には署長は登場しない。

太郎 結婚！

署長 ……

太郎 久しぶりに水入らずで話そうなんて言出すから、何かと思たらなんなんですか？

署長 ……

太郎 いやとか、そういう問題じゃなくて、結婚なんて本人の意志の問題でしょ。いきなり結婚相手がいるから結婚しろと言われて、はい、そうですか、というものじゃありませんよ。

署長 ……

太郎 そうですよ。だいたい僕が保護観察員になつたのだから、お父さんが勝手に「おまえもわしのあとを継いで警察官になれ、なんて言出すから、困た挙げ句まあ顔を立てて似たような仕事を選んだんですよ。僕だつて人並にやりたいことだつてあつたんです。

署長 ……

太郎 まあ、なんだといわれて答えるような仕事じゃないですけど。

署長 ……

太郎 お父さんもしつこいな。童話作家ですよ。どうわかるか。子供が好きだつたんです。だからまあ子供と接していただける仕事がよかつたんです。

署長 ……

太郎 少年課？勘弁してくださいよ。お父さんのところみたいになんでもかんでも少年院にぶちこんだんじゃ解決しないんです。

署長 ……

太郎 怒らないでくださいよ。とにかく僕は忙しいんです。結婚なんてまだまだ先のことです。きっぱりお断りします。

署長 ……

太郎 美人だつて、そういうことをいつてるんじゃないんです。で、どういう人なんですか。

署長 ……

太郎 大島カンパニー？あのやくざ集団ですか。

署長 ……

太郎 今は株式会社だつて、お父さん、警察署長じゃなひですか。あつらの正体なんて、子供でも知てますよ。それを…。

署長 ……

太郎 気でも狂たんですか。何で僕が大島の一人娘なんかと。失礼します。

署長 ……

太郎 どうして、街出るんですよ。子供達が僕を待っているんです。とにかく、この話はなかつたことにしてください。

太郎 無然として去て行く

## 第三場

たける 良彦の隠れ家ツリムウスである。たけると朋子が入ってくる

たける ここが俺たちの隠れ家です

朋子 隠れ家？

たける まあ 家みたいなものです

朋子 ここがおうち？

たける 汚いところですけど

朋子 でもこのエレベーター、なかなか動かないんですね

たける エ、エレベーター？

朋子 荷物用のエレベーターなんてドキドキします。はやくお部屋に案内してください。ピーターパンのお

話を聞かせてくれる約束ですよ

たける あの、ここがお部屋なんです

朋子 はい？

たける ここがお部屋、これは動きません

朋子 お台所は？

たける ここです

朋子 寝室は？

たける ここです

朋子 もう一人の方のお部屋は？

たける ここです

朋子 食堂は？

たける ここです

朋子 おトイレは？

たける ここです。あいえ、あの、外なんです。あ、大丈夫です。ちゃんと草むらもあるんです

朋子 お風呂は？

たける 裏に小さな川があって、あの、冬はちろと寒いです

朋子 お手伝さんはどこにいるの？

たける ここです

朋子 え？

たける 僕を召使いだと思ってください。僕、これでも働き者なんですよ。あ、もう一人いた奴、あつ良彦

ていうんですけど、あつはダメです。ただうるさくだけで何にも出来なひんです。でも僕は一生懸命やりますから。あの、小さくて汚ところだけど、迷惑かけないように頑張りますから。

朋子 いやです。

たける そうですよ。こんなところじゃ、やっぱりダメですよ。

朋子 あなたはお手伝いさんじゃなひです。召使でもなひし、お友達です。

たける はい。

朋子 だから、あの良彦さんに話すみたひに話してください。

たける でも

朋子 そうしてください。

たける はい。

朋子 わかりやあ、それでいいんだよ。

たける なんです。

朋子 あの、わたし、真似してみたんですけど、おかしいですか。

たける いや、その、なんというか、びくりしました。

朋子 「しました」なんて言わなひでください。

たける じゃあ「びくりした」じゃなひかよ

朋子 そうです。そういう風にお話してください。じゃあ「びくりしたかよ

たける ああ、たまげたぜ。

朋子 もと言ってください。

たける またく、お嬢さんだと思てたら、とんでもない奴だな、でもよ、案外おまえ、いい奴だな。

朋子 そうですか？

たける そうですか？はダメ。

朋子 じゃあ「そうかな

たける そうさ、気に入らたぜ。

と、そこに良彦が帰ってくる。

良彦 おい、今日はめし、どうするんだ？

朋子 なんだよ、びくりしたじゃなひかよ。

良彦 おい、たける、おまえ、この人に何かしたのか？

たける なにもしちやいなひよ。

朋子 な、あと、あなたたちみたいな服、なひかよ。

良彦 服？

朋子 あの、そういう変わった服がわたしもきてみたいんだぜ。そういう姿をしていると、何となく空を飛べ、そんな気がするんですけど。

良彦 おい、このしぎり方なんとかしてくれ

朋子 おかしいですか？

たける いえ、とんでもない。

朋子 それでは、服を貸してくださいだよ。

たける でも、汚いから。

朋子 そんなことないです。なんだかここにびたりしていて、動きやすそうだし、わたし、そんなふうになつてみたんです。だぜよ。

良彦 まあ、本人がそういうんならな。

朋子 うれしい！

服を脱ごうとする。

良彦 ちちと待てよ。

朋子 だめですか。

良彦 まあ、服は貸してやるから、ここで着替えるなよな。

朋子 でも、ここがお風呂だて。

良彦 おまえ、妙な下心はなつていったよな。

たける 聞き間違えだて。なほら、このぼろ貸してやるから、裏の草むら行って着替えてこいよ、はい。

着替えを持って朋子が去る。

良彦 知らないぞ。俺、頭がおかしくなってきた。

たける 本当に純粹な人だよな。

良彦 馬鹿だよ、ありや、で、どうするんだよ。

たける とにかく、あの人の口に会うような食物を探してこないとな。

隅にある空き缶をひくり返すと中から小銭が落ちる。

良彦 おい、なにするんだよ。

たける ちちと買い物に行くよ。

良彦 それ、ここ三ヶ月かたて貯めたんだぞ。

たける わかてるよ。

良彦 二人がかりで、ちちと貯めたんだからな。勝手に使うなよ。

たける その割には少ないな。ちちと一食分てとこらだ。

良彦 おい、どんなに馳走を買ってくるもりなんだ。相当あるはずだぞ。

たける ばか、俺たちがいつも喰っているようなものと一緒にするなよ。

良彦 待てよ。二人が賛成しなければこの金には手をつけないうて約束したじゃないか。  
たける なんだ おまえ反対か。

良彦 当たり前だろ。三月月の苦勞をどかのお嬢さんの気まぐれに付き合せてパーに出来るかよ。俺たち二人なら一週間は食える金だぞ。

たける 明日稼げばいいんだよ。

良彦 明日は空の飛び方を教えるんじゃないかたのか。

たける ……

良彦 大体おまえ 本気で考えてるのかよ。あいつの家見けて礼金をもらうんだろ。それには金もかかる。元手がいるんだよ。おい、おまえ 本気で探す気あるんだろうな。答えろよ。

たける 行てくる。

良彦 やめる。俺はまだ賛成してないぞ。

たけるは黙って横をすり抜けようとする。良彦が前に立ちほだかる。

たける 殴るぞ。

良彦 やてみる。

にらみ合う二人。そへ 朋子が着替えて戻てくる。

朋子 ならめこしてるのかよ。

たける 腹減ただろ。

朋子 腹減た？

良彦 お腹がすいてなにか贅沢なものでも食たんじゃありませんかて言うてるんですよ。あああ、また古からのスタートか。

朋子 食たくありません。

たける でも

朋子 わたし、ダイエットします。少しでも早く空を飛ぶように。

良彦 参たね、これは。

太郎が窓の外から声をかける。

太郎 こんばんね。

良彦 なんだよ、びくりするじゃない、かよ。

朋子 びくりするじゃないかよ。

太郎 おや、今日はねずみ君も来るのか。

朋子 ねずみ？

太郎 いや、違た。なんだ、新しい仲間が増えたのかい。

たける 悪いかよ。

太郎 いや、そういうわけじゃないけど、ね。食るものと寝るところのことを考えると、少し気になるな。

良彦 関係ないだろ。

太郎 そんなことはないさ。見たところきれなお嬢さんじゃないか。お嬢さん、いったいどうしてこんなところにいるんですか。

たける 関係ないって言うてるんだよ。第二、いつはお嬢さんなんかじゃないぜ。俺たちとおんなじ乞食仲間だし、朋吉っていうんだよ。北のほうから流れてきて、偶然一緒になっただよ。

太郎 そうか。で、お腹はすいていなか。本当は施設に帰るのが一番だが、なかなかそうも行かないらしい。とにかく仕事だけはとりあえず探しておくから、今度は逃げないでちゃんとやるんだぞ。

良彦 はいよ。

太郎 じゃあ、僕はこれで。朋吉君、明日また会うよ。今日は何だか落ちつかないみたいだから、明日ゆくり話をしよう。おやすみ。

太郎 帰る。

たける またく、お節介な奴だ。

朋子 あの方、お名前はなんておっしゃるんですか。

良彦 あの方なんてもんじゃな、いよ。神谷太郎、二十六才、今のところ独身、保護観察員で奴、あわれな俺たちを守ってくれる、正義の味方だよ。

朋子 太郎さん、おっしゃるんですか。

良彦 ああ、食べ物を持てきたり、仕事を紹介しようとしたり、まあいろいろとお節介な奴だよ。

朋子 立派なお仕事なんですね。

良彦 勘弁してくれよ。俺たちがいちばん欲しいのは自由な暮らしなの。あいつが絶対に俺たちにくれることが出来ぬのも、その「自由」ってやつなの。

朋子が座り込む

たける どうしたんだよ。

朋子 わからないの。何だか胸がいたく。

たける ああ、こんな汚いところにいたから。おい、窓開けろよ。風入れなきや。あと、俺、水くんでくるから、ちょっと待てて。

朋子 違うの、なんか胸の奥が締め付けられるみたいで、こんな気持ちになたの、初めてなの。

良彦 いつから、そうなたんだよ。

朋子 さっき、あの太郎さん、て方がいらして、してから。

良彦 そいつは病気だな。やばい、病気だよ。

たける 病気？

良彦 ああ、「」から始まるやばい、病気、寝るのが一番だ。

朋子 ても

良彦 きつといつがピーターパンの話でもしてくれるよ。その病気についてはな俺結構詳しいんだよ。ほらこの辺でいいだろ

朋子 わかりました。

朋子 横になる

たける あ、

良彦 俺も寝ろぞ。

良彦 離れたところに横になる。たける ピーターパンの本を読み始める。

たける

『ピーターはいいました。僕と一緒にネーランド行こう。そこには仲間がいる。永遠に大人にならな。仲間たちと、一緒に楽しく暮らしていこう。僕らにはお父さんもお母さんもないけど、楽しい時に一緒に笑える。つらいことにもみんなを立ち向かう。そんな仲間がいるんだ』

朋子 いつの間にか寝息を立てている。

たける

寝ちぢたよ。疲れてたんだな。

良彦

あという間の失恋だったな。

たける

なにが。

良彦

ごまかすなよ。

たける

俺も寝るか。

## 第四場

次の日の朝 太郎の部屋

太郎

おはようございます。

署長

∴

太郎

朝からなんですか。結婚のことならもう断りましたからね。

署長

∴

太郎

延期？いったいつの予定だったんですか？

署長

∴

太郎 み三日後。そんなの延期にならないほうがどうかしてるんですよ。まあ僕に関する限り無期延期ですけどね。

署長

∴

太郎

ともかく、この件でもう僕を呼び出したりしないでください。失礼します。

署長

∴

太郎

街の様子ですか。どうしたんです。いきなり。僕が保護観察員になってから。そんなこと気にしたこ

となかたじやなですか。

署長

…。

太郎 いろいろですよ。毎日きちんと学校に行ってくれている子はいんですが、問題はホームレスの子供なんです。僕らもきちんとした施設をつくらなくてはなりません。どういう訳かそこを逃げ出してしまふ子供がいるんですよ。最初はなんとかして連れ戻そうとしていたんですが、最近は彼らを心の底から理解しようと努力しているんです。

署長

…。

太郎 確かに遠回りですよ。でも、理解することではしか彼らをつかんでおくことは出来ないと思いますが、お父さんたちみたいに、閉じこめていたんじゃないやダメなんです。彼らはまるでピーターパンのように、自分たちだけの世界で大人になることを拒否して生きているんです。

署長

…。

太郎

ピーターパンを知らないんですか。

署長

…。

太郎 そうです、おとぎ話ですよ。でも、おとぎ話の中にしかな、真実もあるんです。僕らには分からない彼らにとての真実があるのなら、僕はそれを知りたいんです。ではこれで、僕は忙しいんです。もう結婚とか、無駄な話で呼び出さないでください。

太郎 去る。

## 第五場

街角 ねずみが座っている。たける、良彦、朋子がやってくる。

ねずみ

だめだよ。今日は「こ」あたしが取ったんだからね。

良彦

なんだよ、いつも一緒にやるじゃなにか。

ねずみ

今日はダス。明日もダス。ずーとダス。あたし、やり方を変えたの。これからは一人でやるんだから。

良彦

なんかあても知らないぞ。

ねずみ

なに言ってるんだよ。いつもわたしが守てやてるんじゃないか。

良彦

馬鹿言え。

朋子

みんなでやりましょうよ。

ねずみ

あんた、何にも分かってないんだよ。

朋子

みんなで行ったほうが楽しいと思うね。

ねずみ

おい、どっか行くのかよ。

良彦

ああ、ちよとネバーランドまでね。

ねずみ

まだ、やてるんだ。あんたさあ、いい加減に目をさましたら、笑われるよ。本当に。

たける うるさいな 話しかけるなよ

ねずみ あらあら。恋をすると少年は大人になるっていうけど あんたはガキのまんまね

朋子 恋？

ねずみ いい、この少年はさ あんたに…。

たける 黙れ

ねずみ ああこわいこわい。

そへ 太郎がやってくる

太郎 おや みんなそろってるね

良彦 また来たか

太郎 ねずみ君もいるのか。これは好都合だ。ああ 朋吉君

朋子 朋子と呼んでください。

太郎 朋子君ね よし、メモしておこ

良彦 じゃあな

太郎 おと、今日はそういう訳にはいかなんだ。昨日言ってた仕事のことだけどいいのが見つかったよ。多分今度は気に入ってもらえると思うんだ。

ねずみ あたし、帰るね

太郎 だめ、だめ。なんとお好み焼き屋さんの売り子なんだ。残たらみんな持って帰って行って言てたぞでも 君達みたいな元気な子供たちが売ってたら売れ残るわけないものな

良彦 元気な子供たちってなんだよ

朋子 わたし元気です

ねずみ あんたは黙てな

たける おい。

太郎 まあいろいろ都合もあるだろうけどこの太郎さんが苦勞して探してきたんだ。こんな道路に塵てるよりずっといいぞ。さあこれが着替えた。一度家に帰って水でも浴びて、きれいになって集合だ。

ねずみ おまえがやれよ

太郎 いやあ 嬉しいなあ たまたま一つ余分があたよ。これ 君のね

朋子 はい。

太郎 じゃあ、きちんと着替えてお昼に集合な。ちぶりお好み焼きが食られるぞ。さて、打ち合わせ、打ち合わせと。

洋服を置いて太郎が去っていく。

ねずみ なんだよ、こりゃ。

良彦 疲れるんだよな あつ。でもこの服 古着屋に持てけば金になりそうだ。

ねずみ なるほどねよし。

服を集めるが、朋子が服を持って離さない。

ねずみ 離せよ。

朋子 いやです。

ねずみ 離せていつてるだろ。

たける やめろよ。

ねずみ こんなもんどうするんだよ。まさかこんなもの着て出かけるもりなのか。

たける そうだよ。

良彦 おまえ、本気が。

ねずみ いいかげんにしろよ。おまえ、馬鹿だよ。目が見えないのかよ。あの女は太郎のこと好きなんだぞ。そんなの一目見れば分かるじゃないか。

朋子 わたしが、太郎さんのこと、好きなんですか。

たける ちよと、先に行つて着替えていてくれないか。

朋子 でも

たける 早くしてくれよ。

朋子 去る。

たける 言いたことがあたら言えよ。

ねずみ 別にいいよ。

たける 朋子さんが、太郎のこと好きだつて言たいんだろ。

ねずみ まあ、な

たける そんなことわかつてるんだよ。あつ、ずるいよ。昨日きなり来てきてよ。それでいきなりこんなにちちまうなんてあんまりだろ。お、そう思わないか。あつが朋子さんになにやてや。ただよ。あつが一晩泊めてや。たか。あつがピーター・パンの話したか。あつが空飛ぼうて言てや。たかよ。あつ、何にもしてないじゃないか。汚よ。そんな馬鹿なことあるかよ。

ねずみ しょうがないだろ。

たける わかつてるんだよ。しょうがないつてことはさ。

ねずみ 忘れちまひないじゃなひかよ。仲間だつているんだから。あんな女、関係ないよ。

たける でも…

ねずみ そんなにあの女が好きか。

たける 悪いか。

ねずみ 関係ないよ。よし、わかつたよ。あたしが教えてやるよ。

たける なにを。

ねずみ だからその、女の口説き方だよ。

たける 誰か？

ねずみ あたしが。

たける 何を？

ねずみ 恋の仕方だよ。

後で良彦がわらいこらげ。

ねずみ 良彦、てめえぶところすぞ。

良彦 悪い悪い。でもよ。

ねずみ いいんだよ。ちちとつち来よ。相手してやるからよ。やってみる。

たける おお。

ねずみ いいか。まずデートを申し込むんだ。

たける おお、デートしようぜ。

良彦 おまえ、朋子さんにそう言うのかよ。

たける まさか。

良彦 あれを朋子さんだと思え。もう一回。

たける こ、今度ば、僕と、バ、デートしてくれませんか？

ねずみ やればできるじゃん。

たける それから、どうするんだ？

ねずみ ほめる。

たける ほめる？

良彦 何でもいいからほめる。ほれ。

たける ……。

ねずみ なにしろしろ見てるんだよ。あたしを、朋子さんだと思え。何でもいからほめる。女はそれを待てるんだよ。

飢えた鶏のようで

たける きれいなぼろ服ですね。そのズボンの汚れのワンポイントがすてきです。あなたのまなざしはまるで

ねずみ てめえ、喧嘩売ってるのか！ああ、もうやめたやめた。

たける これからどうするんだよ。

良彦 おまえ、まじめにやる気あるのか？

たける うん。

ねずみ いよいよデートだ。海でも連れて行く。浜辺に腰掛けて、夕日を眺める。

たける ちちとつとターンが古くないか？

ねずみ こういう昔風なのに弱んだよ。朋子さんみたいのは、ほら、波の音が聞こえてくる。夕日がゆく

り沈んでいく。

たける うん

ねずみ 夕闇が近づく。そしたらどうする。

たける そとねずみの肩を抱く。一瞬うつりするねずみが、すぐに我に返ってたけるを突き飛ばす。

ねずみ 気が早いんだよ。そと見ゆるだけでいいんだよ。なんにも言わなくていいよ。いいか。女は自分を見てほしいんだ。世界中の奴らからゴミみたいに言われてもな。時々いいんだ。おまえがいるから俺はがんばれる。て。みづめてくれる人がほしいんだ。(気分を変えて) わかたか。

たける あ ああ

ねずみ 大丈夫だよ。かこわるくても心を込めて話せば、絶対伝わるよ。

たける うん

朋子が戻ってくる。

朋子 似合うかよ。

たける 最高にきれいですよ。

朋子 え。

たける さあ、僕も着替えてこなくちや。手伝ってくれるかなあ。

朋子 はい。

たける 朋子去る。

良彦 いいのかよ。

ねずみ いいわけないだろ。

良彦 馬鹿な奴だな。

ねずみ あいつが落ち込んでるところ見てるほうがいやなんだよ。

良彦 まあ、いろんな考え方があつて、どうするんだ。

ねずみ 行けるわけないだろ。お好み焼きなんて、ばかばかしくてやてられないよ。

良彦 まあ、そういうことしておくか。俺は行くぜ。

ねずみ 勝手にしろ。

良彦 腹いっぱい食わせてもらおうとするか。じゃ、あとで会おうな。

ねずみ 行かないって言ったろ。

良彦 じゃあな。

ねずみ あたしは行かないからね。お好み焼きなんか大嫌だ。みんな喰いすぎて死にまえばいいんだ。

良彦 あとでな。

ねずみ 馬鹿野郎。

良彦とねずみ 左右に別れ去っていく。

## 第六場

別の街角 克也 人目をばばかりのように携帯電話をかける

克也 克也でございます。人捜しですか。はい、順調に進行中です。実は、その、おんなのお写真などお借りできればと思ひまして。はあ。ちびつとところあたりがですねえ。

電話 ……

克也 いえ、まだほつきりとは、お任せください。お写真さえお借りできれば、今日の夜にでもお届けできるかもしれません。よろしければ、あんなこととか、こんなこととかして、二度と逃げ出さないように思ひ知らせて……。

電話 ……

克也 いえ、殺したりは、え、おまえを殺す？そんなだては、死にたくないです。

電話 ……

克也 会長の娘さん？

電話 ……

克也 会長の娘さんが、なんでまた？

電話 ……

克也 あ、そりや秘密厳守ですね。結婚式から逃げ出したと。親の面目丸ぶれですね。はあ。

電話 ……

克也 はい、死にたくないです。丁重に扱います。指一本ふれたりしません。気遣、タプ、お手当ガツポリ、これがわたくしのモットーです。そういえば、お手当というか、ご褒美の方は、かほど。

電話 ……

克也 金目当てなんてとんでもない。でも、気持ちだけで結構なんです。あの……。

電話が切れる。

克也 ちきしょう、いいように人をこき使やがて。今にみているよ。いつまでもおまえらにあごで使われるチンカツさまじゃなひぞ。あのアホ娘が大島の一人娘とはね。こいつは使えるネタだな。一勝負できそうだとにかく、あのガキどもをみつけないと。さて。

そへ、太郎

太郎 やあ、克也じゃなひか。

克也 なんだ、太郎か。

太郎 あいかわらぬかがわしいことをしてるみたいだね。いい加減に足を洗わな、ともうかばてあげられなひよ。

第七場

克也 おまえにはわかんないよ。ガキの頃からいい子で来たおまえにはな

太郎 なに言ってるんだ。おまえがいまだに大通りを歩いていられるのも、僕が親父に「長い目で見てあげてください」って頼んでるからだぞ。

克也 笑わせるなよ。俺に手を出せないのは、俺のバックに大島カン二ーがいるからだよ。

太郎 そんな馬鹿な話はないさ。

克也 そうやって夢をみてな。現実はずっと汚らしいものさ。

太郎 そうかもしれない。だからこそ、僕はその汚い現実から子供達を守っているんだ。

克也 おまえ、それ本気で言ってるのか。

太郎 本気だとも。

克也 だからおめでたいんだよ。おまえのことガキどもがなんて呼んでるか知ってるか。ズレ太郎ていうんだよ。やることなすことずれてるからさ。所詮金持ち育ちのお坊ちゃんだ。貧乏だつたり親をなくしたりした奴のことはわかりこねえ。

太郎 そんなことはない。

克也 まあ、勝手に正義の味方をきどってる。だが、俺のそばには近づくな。俺は忙しいからな。行くよ。

太郎 今の電話か。

克也 なんだ、聞いたのか。

太郎 ちょっとな。人を捜してるのか。

克也 秘密厳守の話なんだ。ばれたら俺はぶち殺される。

太郎 まさか。

克也 大島カン二ーにまさかはないの。どうかのアホと大島の一人娘を結婚させようとしたらしいや。なんか警察関係のガキらしくて、まあ、暴力団と警察の癒着でやっだな。道具に使われてるとも知らず、すかりその気になってるらしいや。それで女に逃げられちゃな。男として最高にみともないぜ。まったく顔がみてみたいよ。

太郎 案外近くにいるかも知れないよ。

克也 まあ、俺が娘を連れ戻せば大喜びで結婚式だ。男もアホづら下げて、にたにたしてるんだらうよ。

太郎 多分、結婚式はないと思うよ。

克也 俺をなめてるな。もうちゃんと目星はついてるんだ。今日中にみつけたさ。じゃあな。

克也 去る。

太郎 僕 そんなアホづらかな。まあいや、きばりことわしたもんな。僕はどちらかといくと朋子君のよ。うな、ああいうタイプのほうが好みだし。よし、頑張ってお好み焼きをつくるか。みんな、来るかな。

太郎 去る。

秋祭り。お好み焼き屋の屋台が出ている。

たける はい、いらしゃい、いらしゃい。おいしいお好み焼きですよ。

朋子 お好み焼きですよ。

良彦 はい、はい。…てめえ、買えよ。買わない？ ガキだと思てなめてるなの野郎やめろよ。

たける だてあの野郎 あちのたこ焼きなんか買いやがて。

良彦 おまえ、始めると結構燃えるな。

たける だておまえこれほとんど小麦粉だけじゃなやかよ。こんなもん四百円で売るんだろ。笑いがとまんねえよ。

良彦 そんなこと大声でいうなよ。

たける それでも馬鹿が買ってくんだよ。こりや、俺達のほうが正直な商売だぜ。最初から「金くれっていうんだからな。

良彦 そういわれると落ちつかないな。

たける ま、俺はどうでもいいけどな。しかし、おまえ似合うな。

良彦 おまえこそ、全然似合わないじゃないかよ。

たける 小さすぎるんだよ。まあ、そのかこならびたりだな。

良彦 なにに。

たける おまえ、告白するんだろ。朋子さんに。

良彦 なんだ、そのことか。

たける やるなら早くしろよな。初めてやるお好み焼きに朋子さんが夢中になってるうちによ。また「どうやて空飛ぶんですか」なんて真面目な顔して聞かれたらえらいことになる。

良彦 うん。

たける 彼女の家探すまでは、何とかごまかさないと、バードもんな。

良彦 別に俺はそんなつもりで。

たける ああ、わかてるわかてるよし、ちょうど客も途絶えたしな。今だろ。

良彦 いや、まだ、その、心の準備が。

たける なにいつてるんだよ。お好み焼きが珍しいみたいで、お客がこようとこまいと十でも二十でも焼けるんだ。すぐやれ。

良彦 お、おお。

たける 夢中でお好み焼きを焼けている朋子に近づいたける。

朋子 おう、朋吉。

たける はい。…なんだよ。

たける いやその朋子さん

朋子 なんだよ。忙しいんだからよ。早く言えよ。

良彦のところに戻るたける

たける あんなふうに言われたらうまいえなひよ

良彦 おまえが教えたんだろ。ああうしぎりかた

たける だて、頼まれたら…。

良彦 自分めしたことは自分で責任持の。「僕と今度デートしてください」だほら行は

再び朋子のところに行くたける

たける 朋子さん

朋子 なんだよ

たける ぼぼぼぼ

朋子 ボール！

たける は？

朋子 ボール取てくれよ

たける はい。

朋子 こんどはめちやくちや大きいの焼くからな

たける 楽しみだなあ

良彦 おい、真面目にやれ

たける 朋子さん ぼぼぼくと…。

朋子 小麦粉！

たける え？

朋子 小麦粉取てくれよ

たける はい。

ボールを渡す

朋子 めざすは直径八十センチだな

たける あの…。

朋子 早く言えよ

たける ぼぼぼくとこ、今度デ、デ、デ…ちかいですね

朋子 だから、ちかいの焼くっていつてるだろ

たける だから、その、僕と、あの…。

ねずみが着飾って登場する

ねずみ ぜんぜんお客さんじゃないじゃん

たける なんだ おまえ

ねずみ 様子見に来たんだよ。なんだ、似合うじゃないかよ。

たける どうしたんだ、そのかこ。

ねずみ 似合うだろ。

良彦 や、ぱり来たじゃないか。

ねずみ あと丁寧な口きけよ。あたしはお客様なんだからね。

たける 金あるのかよ？

ねずみ 当たり前だろ。

朋子 ちうと待てるよ、今さうかいの焼くからな。

ねずみ おい、たける、こいつになんかしたのか。

良彦 これからだよ。

ねずみ ふん、弱虫

たける なんだと。

ねずみ おまえなんか、男の腐た匂いがお似合なんだよ。

たける 殴るぞ。

ねずみ じゃあ、真面目にやれよ。せかく教えてや、たんだからよ。手抜いたら、殺すぞ。

たける よし、みてろよ。

みたび 朋子のそば。

たける おい、朋子。

朋子 はい。

ねずみ 下品

たける うるさい！

朋子 はい。

たける おまえに言ったんじゃないんだよ。

朋子 ごめんなさい。

たける きききききと君を遠く連れて行ってあげるから。ネ、ネ、バーランドは無理かもしれないけど、僕には僕にしかできなことがあるから。だからそれを君に見て欲しいんだ。もし、君が分かってくれるなら

ちようごそ、太郎が来る。

太郎 やあ、頑張ってるかな。

朋子 はい。

たける あ…。

朋子 見てください、こんなに大きいのが焼けたんですよ。

太郎 すいいなそりや。朋子君は才能があるんだね。

たける あいつ、なんとかしてくれよ。

良彦 泣くな 泣くな。

ねずみ 人それぞれだからよ。しかたないんだよ。

たける うるさい。俺 あいつに決闘を申し込んでやる。

良彦 やめろよ。

ねずみ 負けたら最悪じゃないかよ。

その間 太郎は特大お好み焼きを試食している。

太郎 おいしいじゃないか。

朋子 そうですか。

太郎 うん。小麦粉の味がよく出ているよ。余分な具がはつていなところがいいんだな。シンプルで美味しいよ。

朋子 ちと食べてください。

太郎 いや、こんなに大きいのは僕一人ではね。

朋子 食べてください。

太郎 じゃあ、もう一切れ。

朋子 おいしいですか。

太郎 ああ、ほぺたが落ちそうだよ。

朋子 本当ですか。

太郎 僕が嘘をついたことがあるかい。いや、まだ知り合ってから二日しか経てないね。

朋子 はい、でも。

包丁を持たたたけるが割てはいる。

太郎 やあ、たける君。

たける きさま、俺とは、は、は、は。

太郎 どうしたんだい。

たける は、け、こ、う、ま、そ、う、じ、ゃ、な、い、か。

太郎 なんだ、君も欲しかったのか。包丁なんか持てこななくても、ほら、箸で切れるほど柔らかいぞ。

たける いただきます。

ねずみ だめだ、あいつ。

良彦 見てるうちが情けなくなってくる。

ねずみ あたし、帰るよ。ばかばかしくなってきた。

良彦 嬉しいか。

ねずみ そういうこと言うなよ。複雑な気分なんだからよ。(と、歩き出す)

良彦 おい、俺にも一口食わせろよ。小麦粉だけのお好み焼きなんて、なかなか食えないしな。

ねずみ やめてられねえよ。

と、帰りかけたところで克也と鉢合わせする。

ねずみ 気をつけろよ。…なんだ、チンカツか。

克也 ガキと遊んでる暇はないんだよ。

ねずみ なんだと。

克也 大島朋子！

朋子 はい。

太郎 大島朋子？

良彦 はいって、あんた、大島ていうの？

朋子 はい。

たける 大島カンパニーの？

朋子 大島カンパニー？

たける 知らないみたいだぞ。人漢じゃなほのか。

良彦 びくりしたな。同姓同名か。

克也 俺の目はごまかせないぞ。またく、結婚式すばかして逃げ出すなんてとんでもないお嬢さんだぜ。

たける 結婚！

克也 ガキは黙てる。

たける おい、人漢だろ。朋吉、何とか言えよ。

朋子 大人にならなくてもいい島に行きたかたんです。結婚なんかさせられたくない、わたしが本当に大人になるまで、わたしは子供のままいたかたんです。わたしはひとりじゃどこにも行けなくて、でもピーター・パンは迎えにきてくれなくて、だから自分を探しに行くことにしたんです。

たける 朋子さん

朋子 空の飛び方を教えてください。わたしにも空を飛ばせてください。たけるさん、連れて行ってくれるんですよね。わたしは空を飛びたいんです。ちよと太てるかもしれないけど、わたし、一生懸命やりますから。空の飛び方を教えてください。

たける あの。

朋子 飛なんですか。

たける …。

朋子 飛、な、ひ、ん、で、す、ね。

たける ごめん。

朋子 本当に空が飛びたかたんです。ネーランドに行きたかたんです。

たける 太郎！何とかしてくれよ。おまえ、正義の味方なんだ。朋子さんはな、おまえのこと、好きなんだぞ。おまえ、何とかしろよ。朋子さん、連れて逃げろよ。

克也 太郎？ おまえ、なにしてるんだ。

太郎 お好み焼き屋さんだよ。

克也 お似合いだ。

太郎 みんな、ちやうと席をはずしてくれないか。

ねずみ なんだよ、偉そうに。

太郎 お願いだ。

たける やだよ。

良彦 行こ。

たける やだよ。

良彦 馬鹿野郎！ ガキの出る幕しやないんだよ。

たけるが去っていく。良彦、ねずみが後を追う。

克也 なんだよ、なにかあるのかよ。

太郎 克也、僕はアホ顔かな。

克也 なんだよ、いきなり。

太郎 僕がその、アホなんだよ。警察と暴力団の癒着の、そのだしになたアホなんだよ。

克也 結婚するアホか。

太郎 僕が連れて帰ろうと思うんだが、構わないか。

克也 結婚するのか。暴力団とお仲間になるのか。

太郎 暴力団は嫌いだ。

克也 じゃあ、どうして…。なるほど、わかりましたよ。ちえ、結局骨折り損かよ。この貸しは、絶対返してもらうからな。まあ、今度のところはかこいい役やらせてやるよ。じゃあな。

克也去る。

太郎 そういうわけなんです。

朋子 あの…。

太郎 ちゃんと迎えに行きますから、お父さんのところに帰してもらえませんか。

…。

太郎 子供のまま年をとっていくことはできません。僕は、空を飛んであなたを迎えに行く、ピーター・パン。

にはなれません

長沈黙

朋子 教えて欲しいんです。

太郎 はい。

朋子 ネーランドはどこにもないんですか。

太郎 ここがネーランドなんです。僕もあなたも 自分だけのネーランドに、ずっと住んでいたんです。

朋子 私は…。

太郎 島を出ませんか？

朋子 …。

太郎 親の命令でもなく、裏町での偶然の出会いでもなく、このどうしようもない世界に生きるひとりの男として、空を飛んではなく、地面をしっかりと踏みしめて、僕はあなたを迎えに行きます。待っていてください。

朋子 はい。

朋子 去る。間 たけるが現れる

たける 一人で帰したのか。

太郎 聞いてたんだね

たける 連れて逃げるんじゃないのか。

太郎 ご両親のところに帰るのが一番いいんだよ。

たける 家族なんて大嫌だ！

太郎 そうだね。君は三歳の時、ご両親を亡くしたんだね

たける そうだよ。死んだよ。俺は親戚の間をたらい回しにされて、結局孤児院に連れてかれたよ。親のところに行くのがそんなにいいかよ。おまえいい奴だと思ってたのよ。ちよとうるさいけど、話の分かる奴だと思ってたのよ。

太郎 いい子だから、落ち着いてくれなな。

たける 落ち着くかよ。大人になんかなるかよ。

太郎 君にもきくとわかるよ。

たける わかんないよ。おまえ、裏切ったんだ。

太郎 そんなことはない。

たける 俺はあいつに教えてやりたか。俺たちしか知らないことを。心だけでも飛ばしてやりたか。つたんだ。

太郎 わかるよ。

たける おまえなんかにわかるか。大人の言葉、話すおまえになにがわかるんだよ。

太郎 違うんだ。大人とか、子供とか、そういうことじゃないんだ。

たける 大人の言葉で話すな

太郎 頼むから落ちついてくれよ

たける 大人の言葉で話すな

太郎 君と話したいんだ。君にわかつてほしいんだ。

たける 話なんてやめる。今すぐ飛よ。

たける 包丁を手にする。

太郎 たける君

たける 朋子さんのために飛んで見せろよ。

太郎 包丁を渡してくれないか。

たける 今すぐ飛よ。

太郎 いい子だから聞いてくれよ。

たける 俺はいい子なんかじゃなほ！

たけるが太郎を刺す。倒れる太郎 たけるが逃げる。

太郎 な話をしよう。きとわかつてもらえるよ。

克也がやってくる。

克也 様子 見てたぞ。

太郎 馬鹿だな。止めてくれればいいじゃないか。

克也 たけるの気持ちも分かるしな。本気で刺すとは思わなかつたけど。

太郎 ひとごとだと思つて。

克也 どうせかすり傷だ。おい、手をかすよ。

太郎 たける君たちを呼んでくれなほか。彼らには わかつてもらいたいんだ。

克也 てめえの傷のことを心配しろ。おまえの結婚が巻き起こす大騒ぎのこともな。大変だぞ。ほんとに。

暗転

## 第八場

翌朝 たけるが歩いてくる。後を追って良彦とねずみ

良彦 本当に行くのかよ

たける うん。自首するよ。

ねずみ 太郎も大した怪我じゃなくてすぐ良くなるらしいじゃないか。

たける うん。

良彦 あのさ おまえには黙ってたんだけど 朋子さんの財布 俺 その 預かってたんだよ 返しそびれち  
ぢてさ

たける あ、穹ぼの財布か。

良彦 裏の縫い合わせのところに一万円札が五枚 たたんでつこんであた。

たける おまえ 財布こわしたのか？

良彦 まあ、ちうと働が働いてな。きと保険のつもりでいれておいたんだろう。

たける ちゃんと返せよな。

良彦 これは朋子さんのプレゼントなんだよ。無意識かもしれないけど。だからこれ おまえにやる。これ  
持て逃げるよ。太郎の意識ははきりしてるみたいだから おまえがぢたことすぐばれるしな。

たける 太郎は言わなひよ。

良彦 なんて？

たける そんな気がするんだ。きと包丁で遊んでてけがしたとか 訳のわかんないことを言ってると思う。  
ねずみ だたらなおさら自首することなんかないよ。

たける 良彦 おまえ言たろ。自分のしたことには責任もたなきやダメだてさ。俺 太郎を殺してやろう  
と思たんだけ。負けたと思たよ。ぢて朋子さんはあつを信じたんだものな。あつ、大人だた  
んだよ。

ねずみ ガギのまんまでいいじゃなか。

たける ねずみ これ やるよ。

ピーターパンの絵本を渡す。

ねずみ 馬鹿にするなよ。おまえ一人で大人になろうもりかよ。

たける ネーランドなんかどこにもないんだよな。俺が自分でつくらなひ限りどこにもないんだ。俺 絶対  
太郎よりすいネーランドつくるからさ。おまえも 自分のネーランド作れよ。

ねずみ おまえと一積の島じゃダメか。

たける それもおもしろいかもな。じゃあ 俺行くよ。その辺うろろしてるとさ。俺 太郎の結婚式場に火  
をつけそうだもんな。少し頭冷やすよ。

良彦 しょうがねえさ。

たける 差し入れ 待てるぞ。じゃあな。

たける 去る。

ねずみ うちぢやた。

良彦 おい。山分けな。

一万円札を一枚つ一つにわけける。少し考えて五枚目をねずみに渡す。

良彦 待ててやれよ。どうせ半年くらいなもんだ。差し入れてやれよ。

ねずみ おまえ どうするんだ？

良彦 俺が孤児院の前に捨てられてた時な 良彦で書いた紙切れが添えてあつた。命と名前だけは一応くれたわけだ。その紙切れな 考えてみればひどい親だけど 秋田駅の駅弁の包み紙だったんだよ。

ねずみ 秋田か。

良彦 ああ 俺秋田行ってみる。別に親を探そうてわけじゃないぞ。まあここにも「あきたしな 金も手にいれたし」。

ねずみ 房てこいよ。

良彦 ああ おまえとたけるが結婚する頃な。

ねずみ 馬鹿野郎

良彦 じゃあな

良彦 去る

ねずみ みんないつちぎつた

沈黙 ねずみ 手に持っている一万円札を見める。そへ 克也

克也 おなんだよ 何だよ。万札か。どうしたんだよ。その金 景気いいじゃないかよ。おまえ 泣いてたのか。うれし泣きもしようがないよな。滅多にお目にかかれなほもんな。

ねずみ うるせえ

ねずみ 克也に一万円札をたたきつける。札が勢よく舞う。ねずみ 走り去る

克也 あたいねえ

と、札をかき集めているとポケットの携帯電話が鳴る。

克也 はい、克也でございます。なんだ 太郎か。包丁で遊んでてケガしたて言ひ張ってるんだて？それで納得してもらえるお前はすげえよ。えったける？しらねえよ。話をしたいっおまえ まだそんなこと言ってるのか。大丈夫だよ。あつちだて馬鹿じゃねえ そのうちわかるよ。おまえがばたばたしてどうするんだ。なんだほら。あの「信じる」っての、それいいじゃねえか。ばか、こんな恥ずかしいこと何度も言わせるな。怪我人は怪我人らしく、ベッドでうめいてる。早く直さないと、せかくの婚約者がまた逃げ出すぞ。じゃあな。

克也 電話を切る

克也 どうしてもいつも 馬鹿ばかりだ。

幕が下りる。